

## この村の「一揆」を忘れるな

工藤 和雄

「忘れてはならない。かつて、この村に、農民たちの一揆があったことを、そういう人々がいたからこそ、今の私たちがある」会場に、静かに染み渡るアナウンスが流れた。

増税にあえぐ農民達が、夜な夜な寺の境内に集まっている。その動きを見ていた村の名主は、当初こうした動きに否定的だったが、「ケガズ・飢饉」で苦しむ声に押され、嘆願書の差し出しをかってきた。しかし、首謀者として捕縛され、家族もろともはりつけ台に……。おおむね、そういうストーリーだったと思う。

小学校に通う二人の孫娘たちの演劇発表会があったのは、滝沢市。一昨年の秋のことである。

涙目で声をおさえ、劇を見入る人たちが会場の薄明かりに浮かんだ。

「村の歴史を忘れるな」というテーマに、教師がなぜ、「一揆」を選んだのかは知らないが、演技、

内容とも申し分なかった。

この時ふっと、演目の「一揆」と「南部三閉伊一揆」が、折り重なって思い浮かんだ。

「南部三閉伊一揆」、江戸末期、岩手のこの大地で確かに発生した壮大な民衆のたたかいである。

「一揆」は、弘化四年（1847）と嘉永六年（1853）の二度にわたった。1853年はペリーひきいる黒船が日本に開国を迫っていたまさに、その年。一揆は、江戸時代に南部領内で展開された百数十回の内で、最大規模であった。当時、その地域の人口は五万人、三閉伊通り百数十か村内、一万五千名が起ち上がった。たたかいは、民衆が強力な指導部に結集して整然と行動し、隣藩・伊達藩領に越訴し、藩主の交替と領地の変更を含む諸要求をかかげたものであった。しかも、殿様の交替と要求の大部分を実現した上、一人の犠牲者も出すことなく勝利した……。と、歴史書で少し、知っていた。

中学生の時、「ウグイスナクヨヘイアンキヨウ（794）、カマクライイクニ（1192）」などと、歴史年代を覚える方法として、ゴロ合わせを

して口ずさむ内に、歴史に興味を持つようになっていった。いつしか、「歴史は時の権力者・王様や殿様、偉い代議士さんや大金持ちが作り上げてきたのではなく、名もなき働く人たち、民衆が力を合わせて今日の土台を作り上げた」と、心から思うようになっていた。

人類史、「民」の「闘い」を、ちよつとのぞいただけでも、古代ローマ帝国にたいして七万人が立ち上がった、「奴隷・スパルタクス」の蜂起や、封建的な旧制度と絶対王政を倒し、人権宣言を公布したフランス革命、強大なアメリカを打ち破った、「ベトナム人民の民族解放の闘い（1973年に米軍は南ベトナムから撤退）」など、数え切れない諸国の「民」のたたかいがあった。わが郷土で起きた「南部三閉伊一揆」も、社会進歩につながる、命をかけた、民衆の壮大な闘いであつたと思う。

今は二十一世紀、織りなして、おりなして、蓄積された人間の営み。過去にあつた奴隷制度社会、殿さまが支配する封建社会、さらに、二十世紀まで存在した植民地支配、世界の国々に今やこのよくな制度は存在しない。

子どもたちが演じる一揆を見て、あらためてそ

んなことが過ぎつた。

「南部三閉伊一揆」……。

交渉の局面では、「騙されるな、だまされるな、殿様に騙されるな」が、合言葉だつたとも……。

今の世相とも重なって見える。

若者たちが働きたくとも雇用が確保されない社会。見つけた仕事は臨時、契約社員と呼ばれる不安定な働き方。いつ、雇い止めにされるのかと、不安な気持ちで働かざるを得ない。その数は、就業労働者数全体の三割にも及ぶという。生活苦にあえいで三万人が自殺に追い込まれている。そのことが、十年以上もつづいている。「ブラック企業」と言われる、違法な働かせ方も、社会問題化している。そして、追い打ちをかけるように、増税が相次ぐ世の中。さらに、若者たちが再び戦場に足を運ばざるをえない流れが、着々とつくられようとしていることも気になる。

弱い者たちが、心をついにして、家族の暮らしを守るため、権力に立ち向かった一揆。

子供たちにはどのように映つただろう……。演劇が終了する拍手でわれに返つた。発表会の後に、孫娘にその感想を聞いてみた。

「一揆」についてどう思った？

「じいちゃん、お米はお百姓さんたちがつくっているでしょう。お米を作る人たちが、このままでは、食べていけない、困っている。と言っているのに、その人たちをいじめて、殺してしまったら、だれがお米を作るの？ そしたら、お殿様も困るよね！」

「それから、劇見ていた先生も泣いていたよ」  
ポツリ、ポツリと、考えながら話してくれた。

## 父の選択と祖父の決意

工藤 和雄

「今日はスーパーパームーンが見られます。今日を逃すと十八年後となります」

ラジオが地球に接近する月のことを報じていた。ふと、小学生の頃が思い出された。それは、稲束を乾燥するために、月明かりで「ハセ」掛けする

祖父を手伝っていた情景だ。その時の月もでっかい満月だった。

祖父の名は三太郎、穏やかな人柄で仕事熱心、近所の人達から「サンタさん」と呼ばれて慕われていた。日本酒が好きで、夕ご飯の時は爪の間に土が染みついたフシクレだった手で、コップ酒をチビリちびりやっていた。つまみは決まって豆腐だった。酔いが回ってくると、決まって「ほら、食べろ」と、醤油で満たされた豆腐のかけらが、口に運ばれた。とても、しょっぱかった。辛いお酒の味も染みついていった。近所の宴会から帰ると、あの気丈な爺さんがいつも具合悪そうにへなへなしていた。酒が好きでも強くはなかった。

テレビで相撲放送が始まると、気になる力士がいたらしく、農作業の合間、縁側から顔を出し、のぞきにきた。新聞記事で目を通すのは、いつも三面記事と天気予報だった。本などは、家にはなかった。

若いときは自分の子供達に「勉強では、腹の足しにはならない。元気で稼げば飯は食える」と威張っていた。と、父の弟・おじさんから聞いたこ

とがある。この人が小学、中学生の頃の私の「保護者」、三太郎爺さんだ。

なぜ、祖父が「保護者」なのかと言えば、母は三歳の時、家を出て行った。父は五歳の時、肺結核がもとで、盛岡国立病院で息をひきとった。父の亡き後、おじさんが後を継いだ。そこで、幼かった私の面倒をお爺さんがみることとなった。

祖父から聞かされたことがある。「おまえの父親は戦争中、東京の飛行場で働き、戦争が終わって盛岡に戻った。家計のためにと、弱った身体にもかかわらず無理して、休まず、勤めに出ていた」「それで、病気に……」

当時の父の賃金体系は、休むと無給の日給制だったからだ。入院する前はよく蒸気機関車を観に、盛岡の青山町にある跨線橋まで連れて行ってくれた。手をつないで眺めた蒸気機関車の勇姿は今でも思い浮かぶ。父の手は病弱らしくふわふわしていた。

「おまえの親父は、死ぬ間際まで『カズオ』を頼む、たのむ」と言って亡くなったと、おじさんからも祖父からも聞かされた。

三太郎爺さんの周りにはよく近所の人達が一升

瓶を持ってきては、集まっていた。炭火で焼け焦げた黒いスルメにかじりつき飲んでいた。すると、だれからともなく……。

「サンタさん、『カズオ』大丈夫か」

『グレ』でねか、

『グレ』ねでければいいがな

という声を、大人達の飲み会の側でよく耳にした。近所の人達が両親のいない「カズオ」が「不良」にならないことを心配してのことだった。その時の祖父は、決まり悪そうに下を向き、コップ酒をグイと飲み干していたのが印象に残っている。悲しそうな顔を見るのが嫌で、小学生の私は、いつの日か、「絶対、グレない」と心に決めていた。

盛岡八幡宮の祭りが来ると、近所のほとんどの子供達は親子で祭りに出かけた。その様子を寂しそうに遠目で見ている孫を見かねたのか「明日、八幡さんのサーカスを見に行こう」と連れ出してくれた。空中ブランコや曲芸バイク、お化け屋敷など、はじめて見る光景は何とも心地良かった。しかし、夕方近くになり、帰ろうとすると爺さんが青い顔をして、着衣のあちこちのポケットを何度も確かめている。こんな情けない様はめったに

見せることのない人なのに……。前の年に妻を高血圧で亡くしたその時の顔に似ていた。

「どうした？ 爺ちゃん」と尋ねた。

「さっき、ドンとぶつかつた人に拘られたかもしれない、財布がない」と言った。

両親のいない孫に、お祭りを見せてやりたいと農作業を休んで連れてきてもらった。その爺さんが哀れで涙が止まらなかった。結局、ポケットに残っていた小銭を頼りにしばらく歩き続け、そのお金で間に合うバス停まで歩き通し、家にたどり着いた。家は、滝沢市に近い盛岡の外れにあったから、容易な距離ではなかった。

六年生になったとき、何を思ったのか、「かけっこ」しようと言われ、二十メートルほど走ったことがある。走り終わり、息をゼイゼイしている爺さんは本当に老いていた。それもそのはず、私は五十歳の年齢幅があることから、当時六十歳は過ぎていた。「かけっこ」に負けたにもかかわらず、シワシワの目が緩んでいたのは、孫の成長を実感した満足の笑みだったように思う。

「グレないで育ってくれ」との思いに、忘え切れ

たのか定かではないが、中学を卒業し国鉄の学園入校と国鉄への就職が決まった。当時、国鉄の東北鉄道学園への盛岡枠は二十五名で三百人以上が応募するという難関だった。この思いがけない孫の採用に満面の笑みで、誰よりも喜んでくれたのは祖父だった。

生前、祖父が一度だけ、父の自慢話をしてくれたことがある。「おまえの親父は、とても字がうまかった、勉強も良く出来た、怒鳴ったり、怒ったりしない優しいやつだった」と教えられた。爺さんは享年八十六歳で眠るように静かに息をひきとった。今、仏壇がある部屋には、四つ切り大の結婚式のモノクロ写真があるが、職場の仲間に胴上げされている私を、会場の隅っこで穏やかに見入る祖父の姿がそこに静かに写っている。

三歳の時に私をおいて家を出ていった母を周りの家族や地域の人が悪く言ったのを一度も聞いたことがない。むしろ、祖父は「よく働く嫁だった。田植えをすると近所では一番速かった」と誇らしげに話していた。そして、「綺麗なお母さんだったよ」とも言ってくれた。

四十歳を前にしたときのことである。突然、若い男が職場を訪ねてきて、涙声で話しはじめた。「夕べ母から聞きました。自分には兄さんがいることを……」とその人は、新しい嫁ぎ先で生まれた子であった。ひとりぼっちだと思っただけで育った私に弟と妹がいた。それ以来、母とは親しく行き来がある。近年、亭主も亡くなり、高齢となった母が、会うたびに「苦勞掛けてゴメンな、ごめんな」と言うようになった。私も、「産んでくれてありがとう」と母に素直に言えた。

母が家を出て行ったこと、これには、「何か深い事情」があると、ずうっと、思い続けてきた。最近、その思いが強くなった。出て行った背景には、最後の命をふりしぼった父の「母に対する愛情」が大きく関わっていたのでは……。病に伏す父はこの時二十九歳、母は二十三歳の若きだった。母の将来を心配した父が、病の床から「息子をおいて家を出て行く選択」を強く勧めたのではないだろうか。

母には家に残り、再婚の道もあったと思うが困難は目に見えていた。父が咳き込みながら、一生

懸命、母を説得している光景が目に見えれば。若かった母は、複雑な気持ちで、父の思いを受け入れた。祖父も、その道を全力で支えた。